ファミリーミュージカル

カモメに飛ぶことを教えた猫

Based on the work Historia de una gaviota y del gato que le enseñó a volar
（『カモメに飛ぶことを教えた猫』ルイス・セプルベダ著　河野万里子訳　白水社刊）
© Luis Sepúlveda, 1996

4月20日(土) 全国ツアー公演開幕

劇団四季

このリリースに関するお問い合わせは
劇団四季　全国営業部まで
045-903-4659

新作オリジナルファミリーミュージカル『カモメに飛ぶことを教えた猫』
2019 年 4 月 20 日(土）全国ツアー公演開幕！

劇団四季では、2019 年 4 月 20 日(土)より、新作ファミリーミュージカル『カモメに飛ぶことを教えた猫』を全国ツアー公演にて上演いたします。四季オリジナル製作の新作ファミリーミュージカルが誕生するのは、26 年ぶりのことです (1993 年『歌は友だち』以来)。

本作は、チリの小説家、ルイス・セプルベダの同名児童小説に想を得ました。1996 年に出版され、ヨーロッパでロングセラーとなったこの小説。息絶え絶えの母カモメから卵を託された黒猫・ゾルバが、彼女と交わした 3 つの約束を果たすため、個性豊かな仲間たちと力を合わせて奮闘する姿を描いた物語です。

四季では今回の舞台化にあたり、クリエイティブチームのほぼすべてを劇団内から選出。テーマは「殻を破る」としました。登場するキャラクターがそれぞれ、自分を覆う殻を破り成長していく姿を通して、「自分の殻を破る勇気」「一歩踏み出すことの大切さ」といったメッセージを伝えていきます。

劇団四季ファミリーミュージカルの歴史は、1964 年『はだかの王様』（台本/寺山修司、演出/浅利慶太）までさかのぼります。以来半世紀「生命の尊重」、「愛と勇気の崇高さ」、「友情と連帯の重要さ」など、人生を生きるために必要な精神や道徳をメッセージに織り込んだ作品を次々と上演し、そのレパートリーは、計 30 作以上に及びます。

なお今回のツアーは、児童招待公演“こころの劇場”を中心に上演を予定しています。劇団四季と多くの企業、行政のご協力を得て行われるこの活動は、2008 年度の開始以来、北は北海道・利尻島から南は沖縄県・石垣島/宮古島まで、全国各地にて四季ファミリーミュージカルの巡演を展開。例年約 56 万人の子供たちに舞台芸術の感動を届けています。

未来に生きる子供たちに、舞台の感動を―新作ファミリーミュージカル『カモメに飛ぶことを教えた猫』にどうぞご期待ください。

劇団四季のファミリーミュージカル

劇団四季のファミリーミュージカルには 30 を超えるレパートリーがあり、全国各地で毎年公演が行われています。

いずれの作品も完成度は高く、一般向けの作品と比べても引けをとりません。面白くなければ直ちに騒ぎ出し席を離れてしまう、大人以上に厳しい“子供”という観客を相手に育まれてきたからです。台本、演出、音楽、美術…、全てに妥協は許されません。

今や“海外ミュージカル”だけではなく、『ミュージカル李香蘭』、『夢から醒めた夢』、『ユタと不思議な仲間たち』等の“オリジナルミュージカル”ジャンルにおいても、高い評価を得るようになった劇団四季。そこに裏打ちされる高い創作能力と技術力は、約 50 年という長きに亘る“ファミリーミュージカル”から培われたといえるでしょう。

ファミリーミュージカルで謳われているテーマは、“生きる上で大切なこと”―“勇気”“愛”“友情”“生命の尊重”です。様々な社会問題がはびこり、子供たちが生きる指針を見失いがちな昨今、ミュージカルを通して様々なことを感じ学ぶことは、情操教育の見地からいっても有用なことでしょう。そして、大人たちにとっても、「忘れていた何か」を取り戻す機会となるかもしれません。

“ファミリーミュージカル”は劇団四季ミュージカルの原点。これまでも、そしてこれからも、四季レパートリーの大きな柱の一つであるといえるでしょう。

主な劇団四季ファミリーミュージカル（初演年）

『はだかの王様』（1964 年）	『王様の耳はロバの耳』（1965 年）
『王子とこじき』（1967 年）	『ふたりのロッテ』（1971 年）
『桃次郎の冒険』（1973 年）	『ジョン万次郎の夢』（1974 年）
『ガンバの大冒険』（1976 年）	『人間になりたがった猫』（1979 年）
『むかしむかしゾウがきた』（1980 年）	『嵐の中の子どもたち』（1981 年）
『魔法をすてたマジョリン』（1982 年）	『エルコスの祈り』（1984 年）

※タイトル呼称は、2019 年時点のもの。これまでに計 34 演目を上演。

「自分の殻を破り、一歩踏み出す勇気」
―26 年ぶりとなる四季オリジナルファミリーミュージカルのテーマ

新作オリジナルミュージカルの誕生は、2004 年『南十字星』以来、約 15 年ぶりのこと。ファミリーミュージカルとしては、1993 年『歌は友だち』以来 26 年ぶりとなります。

もともと劇団四季では、60 年代に「創作劇連続公演」と題し、当時若手だった作家、石原慎太郎、寺山修司、谷川俊太郎、矢代静一の書き下ろし企画を実現するなど、オリジナルのセリフ劇を上演。その後、60 年代後半～90 年代にかけては、数多くのファミリーミュージカル、一般ミュージカルに一から取り組み、創作する伝統を持っていました。その集大成として、ミュージカル『夢から醒めた夢』『ユタと不思議な仲間たち』や昭和の歴史三部作『李香蘭』『異国の丘』『南十字星』などの傑作が世に送り出されました。

こうした活発な創作体制を再び始動すべく、劇団内に専門のセクションを新設するなどの準備を進め、第 1 作目として誕生するのがこのオリジナルファミリーミュージカル『カモメに飛ぶことを教えた猫』です。今回、演出を四季俳優の山下純輝、振付を同じく萩原隆匡が務めます。その他、四季技術スタッフより装置・照明・衣裳の各デザイナーを選出。組織されたクリエイティブチームは、本作のテーマを「殻を破る」と打ち立てました。

それぞれの登場キャラクターは当初、目には見えない「自分自身の殻」、言わば「自分本位の意思や欲望」に覆われていますが、純真無垢なカモメの成長過程に関わることで、最終的に、それぞれの殻を破り、種族を超えた新たな関係性を築きます。
殻を破るための一歩を踏み出すこと。一見容易いことのように感じますが、いざ実行するには、どれほどの困難が伴い、どれほどの勇気や覚悟が必要でしょうか。事の実相がますます見えづらくなり、複雑化を止めない時代だからこそ、この作品を通じて、「一歩踏み出すことの大切さ」を、子供たちに届けたいと考えています。
さらにこのテーマは、新作創作への再挑戦という大きな局面を迎えた劇団四季にも重なるもの。試行錯誤しながらも新たな未来に向けて歩みを進めていこうという我々の決意もこの作品に込められているのです。

殻を破って、新たな一歩へ―四季新作ファミリーミュージカル『カモメに飛ぶことを教えた猫』は、強くもあたたかなメッセージを全国に届けてくれることでしょう。

『カモメに飛ぶことを教えた猫』クリエイティブ・スタッフ

演　　出：山下純輝
脚本・作詞：劇団四季 企画開発室
作　　曲：宮崎 誠 ※外部スタッフ
振　　付：萩原隆匡
装置デザイン：喜多川知己
照明デザイン：井上登紀子
衣裳デザイン：岳 彤

ヨーロッパでベストセラーとなった児童文学の傑作

本作は、チリの作家であるルイス・セプルベダの同名の児童文学が元となっています。セプルベダ自身の子どもたちのために書かれたというこの小説は、1996 年に発表。「8 歳から 88 歳までの若者のための小説」とヨーロッパを中心に多くの読者に愛され、大ベストセラーを記録しました。特にイタリアでは大きな話題となり、映画化もされています。

ルイス・セプルベダは、1949 年に南米のチリで生まれました。社会主義運動に参加していた彼は、チリのアジェンデ政権がクーデターによって倒されたときに投獄され、およそ 2 年半、刑務所で暮らすことになります。その後、国際人権団体のアムネスティ・インターナショナルの働きかけで解放されると、各地を旅してまわり、1980 年にドイツのハンブルクを拠点に執筆活動をスタート。主にルポルタージュなどの仕事をし、環境問題を訴える活動にも参加していました。「パタゴニア・エキスプレス」「ラブ・ストーリーを読む老人」といった小説で注目を集める他、「カモメに飛ぶことを教えた猫」のように動物を主人公とした青少年向けの小説も発表し、世界各地の読者から人気を集めています。

彼の歩んできた道ゆえか、セプルベダのどの作品からも「主義主張や文化の異なる者どうしは、どうしたら心を通わせともに生きていくことができるのか」という彼の心の声を感じ取ることができます。カモメと猫―このふたつの異なるもの同士が絆を深め、相手のためを想い行動していく本作も、まさにこうした彼の思想が反映されています。

登場人物

ゾルバ	主人公の黒猫。すぐに手が出てしまう荒っぽい気性だが、心根は優しく仲間思いで、芯も強い。ある日突然、一匹のカモメ、フォルトゥナータの母親代わりとなる。
フォルトゥナータ	子供のカモメ。純真無垢で真っ白なキャンバスのような存在。
大佐	恰幅が良く、街中の猫たちから信頼を集める猫。昔は船乗りだった。秘書とはいいコンビ。
秘書	頭の回転が早い細身の猫。大佐の秘書を務める。
博士	百科事典を信奉する学者猫。事典を侮辱されるとヒステリーを起こし、人格が豹変する。
ブブリーナ	ゾルバと幼馴染の白猫。優しく、凛とした佇まいがある。フォルトゥナータにとっては、お姉さんのような存在。
マチアス	街の展示館に住まう酔っ払いのチンパンジー。曲芸飛行のパイロットと共に過ごしたかつての思い出にすがっている。
ケンガー	フォルトゥナータの実の母親カモメ。餌取りの途中、汚れた波にのまれ、瀕死の重体に。絶命直前に出逢ったゾルバに卵を託す。
ネズミたち	街の厄介者として猫たちに追われ、地下に棲みついている。内心、復讐に燃えているが、明らかな力の違いに降参状態。

ストーリー

舞台は、ドイツのハンブルク。この美しい港町に暮らす黒猫ゾルバは、少々乱暴だが、心根は優しく、芯も強い。仲間の猫たちから一目置かれる存在だった。

夏のある日ゾルバは、汚れた波にのまれて息絶え絶えに横たわる雌カモメ、ケンガーに出会う。彼女は「私の卵を食べないで」、「ヒナが孵るまで面倒をみて」、「ヒナに飛ぶことを教えて」とゾルバに懇願し、絶命する。ゾルバは突然の申し出に驚くが、約束を果たそうと決意。彼はかつて自らの不注意の末に母親を失っており、ケンガーに亡き母親を重ねたのだった。
猫が飛ぶことを教えるなど無謀だと皆が言う中、猫のまとめ役である大佐は、自らのしっぽを懸けて、街中の猫の協力を得る「しっぽの誓い」の実行を提案。約束を果たせなければ、しっぽを切られ、街を追放されるという厳しい決まりだが、ゾルバは同意する。

ゾルバたちは、卵を孵す方法を探るために、街の展示館に住む学者猫、博士を訪ねたが、同じ館に居つくチンパンジーのマチアスに行く手を阻まれてしまう。曲芸飛行のパイロットと共に過ごしたかつての思い出にすがるマチアス。ゾルバたちはその姿を見下し、強行突破を図る。その際、彼が後生大事にしていた飛行用帽子を蹴り落としていたことは気にも留めなかったが、当のマチアスは、怒りに震え、復讐を誓うのだった。

博士の百科事典によって、卵を孵す方法は、長期間体で卵を温めることであると判明。ゾルバは戸惑いながらも、その方法を実践した。そんな中、マチアスがネズミたちと手を組み、卵の破壊を画策する。だがその企ては失敗。やがて卵からヒナが生まれる。生まれたヒナは“幸せになる様に”という願いを込めて「フォルトゥナータ（幸運な者)」と名付けられた。

ゾルバたちの大きな愛情を受け、すくすくと育つフォルトゥナータ。しかし可愛がりが過ぎたのか、フォルトゥナータは自らを「カモメ」ではなく、「猫」と思い込み、一向に飛ぼうとしない。ゾルバは再三導こうとするが聞き入れず、また他の仲間たちもそのことを許してしまっていた。

一方、マチアスはフォルトゥナータへ近づき、やがて猫に食べられるのだと嘘を伝えることで、ゾルバとの仲を引き裂こうとする。あまりのショックに一人思い悩むフォルトゥナータ。そんな彼女にゾルバは、自分たちは家族であると伝え、心からの愛情のかたちを示す。そして、これまで語ることがなかった実の母親ケンガーの話を切り出した。

その後ゾルバは、あるカモメからまもなく越冬すること、このままだとフォルトゥナータがこの街の寒さに耐えられず、死んでしまうだろうということを告げられる。ゾルバは、フォルトゥナータを飛ばすことを改めて決意。そしてフォルトゥナータも、実の母親のこと、大佐が語ったカモメの勇敢さについての話を受け、飛ぶ決意をする。しかしうまく行かずに、猫たちは途方に暮れる。
そこへやってきたのは、マチアスだった。ゾルバのしっぽと引き換えに、飛び方を教えるという。愛すべきフォルトゥナータの命を守るため、母カモメ、ケンガーとの約束を守るため、ゾルバはいかなる決断をするのか。ハンブルクにまもなく厳しい冬がやってくる。